JLTA Newsletter No. 51
日本言語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 51　　発行代表者：渡部良典　　2021 年 (令和 3 年) 9 月 30 日発行
発行所：日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111（代表）
e-mail: u16yoko@gmail.com URL: http://jlta.ac

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大学英語教育の多様化

藤田 智子（桃山学院大学）

東京オリンピック・パラリンピックの開催決定をきっかけに英語教育への熱がヒートアップした 8 年前は、必修の一般英語科目を中心とする大学の統一英語教育プログラムが隆盛期を迎えていた。しかし、今では必修英語を 1 年次だけの履修に減らし IT 基礎などの授業に変更する大学もある。そこに新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、人件費がかさむ必修の統一英語教育プログラムが削減の有力候補に挙げられている。このような背景の中で、日本の大学英語教育には統一から多様に変化する波が来ているのであろうか。

門外漢の私が現本務校の経営学部長になったのが 2 年前、それからは学部の改革や新型コロナウイルスの感染対策に追われ、英語教育とは離れたまま時間が経過してしまった。しかし、今では学部の運営という視点から英語教育について考える良いきっかけをもらったと考えている。

必修の統一英語教育から多様な英語教育へのシフトの一つが、学部の専門に合わせた英語教育への転換である。関東のある私立大学では、来年度から必修の統一英語教育プログラムを縮小し、各学部の専門と関連づけた英語教育を導入する構想があるようである。しかし、対象学生の専門分野によって大きく変わる学習内容に、今まで一般英語を担当していた教員が対応するのは容易ではない。私が経営学部の英語を初めて担当した時も、変化の激しいビジネス業界に対応した学習内容を決めるだけで四苦八苦した。また、学生のニーズを調査するなどの方策を試みたが納得ができる授業にはならなかった。

そこで学部の同僚達のサポートを得て、経営学部の「実践型授業」に英語を組み込んだ新しい演習科目を設置することにした。実践型とは、企業や地方公共団体等と連携して教室外でも学ぶ機会を提供する問題解決型学習（PBL）中心の授業であるが、ここに英語を使う機会をなるべく多く取り入れることを計画している。例えば、学生が英語圏の消費者向けに、連携企業の商品宣伝動画を作成することで販促に協力することや、地域の観光ビジネス復活をめざして企画を立案し、その英語プレゼンテーションを連携先の方々に評価してもらうことなどを想定している。これらにより「教室での英語」から脱却し、実際のビジネス場面で英語を使うことで学生達が学習意欲を高めることを期待している。

しかし、統一英語教育プログラムは、習熟度別クラス編成、レベル別の統一シラバスによる授業、統一テストなどが実施でき、効率的な運営をめざすためには最適の事業形態である。それに比べ多様な英語の授業が無秩序に乱立すれば、プログラムとしての整合性や教育の質が保てなくなる恐れがある。これには多様な授業の評価基準を整理して成績評価のためのルーブリックを作るなど、地道な作業での対処が必要になる。さらに多角的・客観的な証拠を収集し、改善のためのプログラム評価体制を確立しておくべきだと思う。これからは、日本の大学における言語テストの研究者が活躍する分野も、ますます多様に広がっていく予感がしている。

2020 年度日本言語テスト学会 最優秀論文賞 受賞者から
Message from the Recipient of The 2020 JLTA Best Paper Award

受賞者　島田 めぐみ（日本大学）・澁川 晶（国際基督教大学）・孫 媛（国立情報学研究所）・保坂 敏子（日本大学）・谷部 弘子（東京学芸大学））

2020JLTA 最優秀論文賞に拙論を選んでいただき，誠にありがとうございます。審査をしてくださった委員の皆様に著者一同，御礼申し上げます。また，丁寧に論文を読んでくださり，大変貴重なご意見，ご助言をくださった査読者のお 2 人に心より感謝申し上げます。そして，拙論の内容は，2019 年度第 22 回全国研究大会にて口頭発表させていただいておりますが，その場でいただいたご質問やご意見は論文執筆の上で重要なヒントとなりました。ご質問くださった皆様にも御礼申し上げます。

論文「日本語聴解認知診断テストの開発を目指したアトリビュートとテストの分析」は，日本語教育分野の 4 人（澁川晶，島田めぐみ，保坂敏子，谷部弘子）と心理測定分野の孫媛の共同研究の成果です。テスト内容の検討や質的データの分析は日本語教育分野の 4 人が， CDM（Cognitive Diagnostic Models，認知診断モデル）による分析は孫が担当し，そして，アトリビュートやテスト全体のデザインはそれぞれの立場から意見を出し合い検討しました。異なる分野の人間が協力したことにより実現した研究と言えます。

これまでの CDA（Cognitive Diagnostic Assessment， 認知診断アセスメント）研究では，既存のテストを利用することが多いため，テスト自体の検討に関する報告は多くありません。私どもの研究ではCDA目的のためのテスト自体を開発しており，この場合，アトリビュート検討，テスト項目作成，データ分析，再検討を繰り返すことになります。拙論では，日本語聴解認知診断テストを開発する過程で行った，297 名から得た解答データを CDM に基づき分析した「調査 1」，13 名の解答過程のデータを質的に分析した「調査 2」，そして，これらに基づいて実施したテスト改善の結果を報告し，これらの方法が CDA 開発に有効であることを示しました。

CDA では，受験者がどのアトリビュートが得意か，あるいは不得意かを示し，今後の指導や学習の指針を与えることができます。有効なフィードバックは，受験直後に提供することが望ましいと考え，現在，オンライン CDA 化に向け準備を行っています。できる限り早い時期に，認知診断オンラインテストの完成，そして運用の結果をご報告できるよう，研究を進めていきたいと存じます。

海外の学会・研究会
参加報告
World Conference Reports

The 2021 AILA Conference

報告者　宮崎　啓（東海大学）

大会：World Congress of Applied Linguistics (AILA) 2021
開催日：2021 年 8 月 15 日～8 月 20 日
テーマ：The dynamics of language, communication and culture in a changing world
開催地：オンライン (Groningen, the Netherlands)

2021 年 8 月 15 日から 8 月 20 日までオンラインで開催された AILA World Congress 2021 に参加した。3 年に 1 回開催されるこの世界応用言語学会は、本来であれば 2020 年にオランダのフローニンゲンで開催予定であったが、コロナ禍のため 1 年延びてオンライン開催となった。オンラインの特性を活かし、参加人数や発表分野別調査等の情報も敏速に報告され、今回はヨーロッパからの参加者が約 6 割でアジアからは約 2 割であった。
参加者の関心度調査では language teaching & learning, multiple languages や language in use といった分野に回答が集まり、testing & assessment は比較的少なかったが、それでもテストと評価の分野で様々な国からのシンポジウムや研究発表を聴く機会があった。特に目を引いたのは、SLA の分野と language testing の分野のさらなる融和を論じたシンポジウム枠で、両分野には未だに距離があることが指摘され、両分野の研究共通点や利点を探りながら今後の相互利活用の重要性が論じられた。本シンポジウム枠では他にも、統合スキルのテストテイキングストラテジーの調査、評価者の認知的観点からの影響、タスクがテストパフォーマンスに与える影響なども発表された。

他の日程でも評価に関するシンポジウムが開かれ、ラテンアメリカにおけるテストと評価の研究動向や問題点の指摘がなされ、独特の多様性を持つラテンアメリカ環境での英語テストと評価の諸問題が論じられ、assessment literacy 向上の必要性を強く主張していた。その他、アメリカ本土や他のアジア諸国からも、多くの発表がなされた。印象に残るものとしては、熟達度テストスタンダード活用は受験者を主要なステークホルダーと考え、伸長度や学習プロセスも併せて再構築されるべきであるといった発表、また、自己評価と熟達度との関連性をさらに深めるべきという発表もあり、大変有意義なオンライン学会であった。次回の AILA では、参加者の言語テスト研究への関心が一層高まることを期待したい。

書評
Article Reviews

Sato, M. & Storch, N. (2020). Context matters: Learner beliefs and interactional behaviors in an EFL vs. ESL context. *Language Teaching Research*, pp. 1-24. doi:10.1177/1362168820923582

言語習得の様々なプロセスに対してコンテクストが及ぼす影響が決して小さくないことは、多くの応用言語学・英語教育学の研究者の共通認識であると言っても過言ではない。これまでも、コンテクストの

影響の重要性を検証する研究は存在していたものの、十分とは言えなかった。本論文が指摘しているように、コンテクストを規定する要因の定義があいまいであったことに加え、単一のコンテクストから得られたデータのみでの検証に留まっていることが従来の研究の問題点として挙げられる。近年、コンテクストが異なると研究結果の再現性が保たれない、つまりコンテクストによって研究結果が異なることが明らかにされているという。この論文の筆者は複数のコンテクストを比較しない限り、誤った結論に到達する可能性を危惧しつつ、コンテクストに応じた英語指導・学習の方法を考える重要性を主張している。本論文は、このような問題を解決するために EFL と ESL の環境を比較し、それぞれのコンテクストの違いが学習者の動機づけやビリーフ、タスクにおけるインターアクションにどう影響するのかを検証した大変興味深い論文であった。

先行研究の概観からは主に次の 2 点が示された。1 点目は、ESL 環境と EFL 環境では目標言語の習得に対してニーズや目的がそもそも異なり、その差がカリキュラムや指導方法・内容、指導者の母語使用などに影響し、結果として ESL と EFL では異なるインターアクションや動機づけが生まれる可能性があることである。2 点目は、これまでの動機づけ研究においては、「動機づけ-行動-習得」という関係性が十分に検証されていない点である。これらを踏まえ、EFL と ESL 環境において、どのようなビリーフやコンテクスト要因が、コミュニケーションタスクに従事する学習者が向ける形式への意識に影響するのか、というリサーチクエスチョンが設定された。調査の概要は以下の通りである。

チリの EFL 学習者 19 名とオーストラリアの ESL 学習者 27 名が参加した。学習者の専攻は商学で共通していたものの、ESL 環境と EFL 環境とで調査の対象となった英語の授業が必修であったかどうか、評価方法、テキストなどに差があった。また、EFL においては参加者全員がスペイン語母語話者だった一方、EFL では中国語母語話者が多かったもののその他の母語話者も参加していた。

データはそれぞれの環境において、グループでのインターアクションの記録とアンケートによって収集された。どちらのコンテクストでも同じディスカッション式のタスクが行われ、学習者の専攻に関わるトピックが用いられた。アンケートでは動機づけ、インターアクション、ピア修正フィードバック、L1 使用についての認識が測定された。また、学習者間のインターアクションは、語彙や文法項目についての学習者同士の話し合いを基にした LRE (language-related episode)を用いて分析された。主な分析結果は下記の通りである。まず、LRE/minute と LRE における L1 使用は EFL の方で多く産出された一方、修正フィードバックから始まる other-initiated LRE の割合は ESL 環境のほうが多かった。また、アンケートにおいては、主成分分析の結果、類似した動機づけ要因を有している一方、主な英語の学習理由に差があることがわかった。また、ESL の学習者の方が L1 使用に重要性を感じていること、そして EFL の学習者の方がクラスメートへの修正フィードバックに対して好意的な志向を持っていることが明らかとなった。

EFL 環境では英語の使用機会は教室内に限られることが多く、明示的な文法指導が行われる。また、タスクの捉え方も異なり、ESL 環境では学習者が自身の専門分野の内容の学習に重きを置く一方、EFL 環境では言語の習得に重きを置く傾向がある。これらの差が、LRE の量や学習理由の違いに影響を与えると考えられた。また、EFL 環境では専門用語などの語彙に苦労する一方、ESL 環境ではそのようなことが少ないためより文法に意識が向けられることや、EFL 環境では母語の使用が禁止されているものの、ESL 環境ではそもそもそのようなルールが無い、というコンテクストの差がフィードバックや L1 使用に対するビリーフに影響を与えていると解釈された。

コンテクストからの影響を考える際、コンテクストの定義と比較対象の重要性を改めて提示してくれた論文であるといえる。多くの研究者にとって参考になるだろう。

評者　今野　勝幸　(龍谷大学)

JLTA 事務局より連絡
Messages from JLTA Secretariat

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき，誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

⑴ 2021 年 9 月 4 日（土）～5 日（日）に開催された第 24 回全国研究大会は盛会のうちに終了いたしました。ご発表、ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。来年度（2022 年度）の研究大会開催予定につきましては、決まり次第学会 website、メール、Twitter 等でお知らせいたします。

⑵ 2021 年度研究例会は 2021 年 10 月 23 日（土）と2022 年 2～3 月頃に開催予定です。

第 53 回研究例会

【日時】2021 年 10 月 23 日（土）13:50～17:30

【場所】オンライン（Zoom 使用予定）

【テーマ】多様な発話の分析方法およびテスト検証への応用について

【概要】近年、パフォーマンステストの検証において、発話データの活用が注目されています。しかし、発話分析に用いられる指標は、正確さ・流暢さ・複雑さ（CAF）などに限られる傾向があります。本例会では、CAF 以外の分析方法及びテスト検証への応用例をご紹介します。また、発話データを実際に分析することを通して、発話分析についての理解を深め、テスト検証の視点を広げることを目指します。

【日程】

13：30～　　受付開始

13:50~14:00　趣旨説明・講師紹介（周 育佳，東京外国語大学）

14:00~15:00 Textual analysis (Dr. Noriko Iwashita, The University of Queensland)

15:00~15:15 休憩

15:15~16:15 Functional analysis (Dr. Fumiyo Nakatsuhara, CRELLA, The University of Bedfordshire)

15:15~15:30 休憩

16:30~17:30 Interactional analysis (Dr. Daniel M. K. Lam, The University of Glasgow)

【申し込み】参加を希望される方は、10 月 16 日（土）までに下記の申し込みフォームにてお申し込みください。

（https://forms.gle/6GJnkHqDrHfLZsV69）

お申し込みされた方に 10 月 20 日までに Zoom ミーティング情報をお送りします。

【参加費】無料

【使用言語】英語

【問い合わせ先】周　育佳（東京外国語大学）zhou_yujia@tufs.ac.jp

第 54 回研究例会

開催内容・時期等については決まり次第お知らせします。

⑶ **『日本言語テスト学会誌』第 24 号**は今冬発行予定です。学会誌の論文等は，J-

STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal) にて同時期に一般公開されます。

『**日本言語テスト学会誌**』は，狭義のテスティングに関するものだけではなく，広く評価に関する**論文を募集**しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど，評価全般に関わる実験・知見を含みますので，どうぞふるってご応募ください。

(4) 日本言語テスト学会では，2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは，2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので，投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに，学会誌の一層の質の向上を目指して，既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や，著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2021 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は，次の通りです。

オンライン投稿審査システムに関する詳細

1. システムのウェブサイト
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2. 次回投稿期間
2022 年 4 月 7 日～2022 年 5 月 7 日
この期間しか投稿ができませんのでご注意ください。

3. 学会誌執筆要領・テンプレート
最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62

4. 問い合わせ先
日本言語テスト学会誌　編集事務局
jlta-edit@bunken.co.jp

(5) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は，テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。2020 年 4 月に講師リストの更新が行われました。詳細は下記 URL からご確認ください。会員の皆様におかれましては，言語テスティングにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。ウェブサイト：
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1154

(6) **J-STAGE** (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal) における『日本言語テスト学会誌』の**アクセス状況**（2020 年 8 月～2021 年 7 月）について報告します。なお、2021 年度のデータについては、書誌事項へのアクセス数と PDF ファイルへの直接リンク数に大きな差があるため、昨年と異なる形式の表を記載しています。PDF への総直接アクセスは 14,239 件（昨年：11,695 件）と前年度からさらに増加傾向でした。ただし、数件の文献に極端に多くのアクセスがあったことはこれまでになかった傾向です。これは、授業形態がオンライン授業で行われた結果、著作権に配慮した形で掲載論文が授業等に使われた可能性があると推察しています。国別のアクセスランキング上位は昨年度と同じでしたが、カナダから PDF ファイルへの直接アクセスが極めて多い結果となりました。

ダウンロード先とアクセス回数

旧：2019/08～2020/07

	国名	書誌事項	PDF
1	アメリカ	3826	3969
2	日本	2468	2779
3	中国	1160	246
4	韓国	808	76

5	ドイツ	683	405
6	フランス	304	72
7	ロシア	223	44
8	リトアニア	136	27
9	イギリス	96	1099
10	カナダ	59	270

新：2020/08～2021/07

	国名	書誌事項	国名	PDF
1	アメリカ	2628	カナダ	5028
2	日本	2483	日本	3277
3	中国	1028	アメリカ	2606
4	トルコ	789	中国	483
5	ドイツ	399	イギリス	322
6	フランス	154	トルコ	303
7	イギリス	146	フィリピン	236
8	ロシア	138	フランス	209
9	韓国	120	チリ	171
10	シンガポール	88	スウェーデン	166

(7) 本学会ウェブサイトには，Web 公開委員会が公開を進めてくださった，**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。どうぞご活用ください。

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル（Tutorial，日本語）

・「よい」テストの条件（What is a ‘good’ test?: validity, reliability, and practicality)
・テストの構成概念（The concept of test constructs)
・テスト細目（Test Specification)
・リーディングテスト（Testing Reading-6 basic test formats-)
・リスニングテスト（Testing Listening)
・ライティングテスト（Testing Writing)
・スピーキングテスト（Testing Speaking)
・語彙・文法テスト（Testing Vocabulary & Grammar)
・測定の標準誤差（Standard Errors of Measurement)
・効果量とは？（What is the ‘Effect Size’?)
・学習に役立つテスト結果の報告（Test result reporting to enhance learning)
・古典的テスト理論（Classical Test Theory)
・確認的因子分析（Confirmatory Factor Analysis)
・メタ分析（Meta-Analysis)
・質的方法（Qualitative Methods)

ワークショップ・ビデオ（主に日本語）

2014
・Workshop 1 – CAT の基本的な考え方（スライド）
・Workshop 2 – J-CAT（スライド 1，スライド 2，スライド 3）

2015
・Workshop 1 – テストデータ分析入門（in English）
・Workshop 2-1 – 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方―妥当性と信頼性に留意して（スライド）
・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students’ English Proficiency（スライド）

2016
・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量ー入門編（スライド）

・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量ー理論編（スライド）
・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量ー実践編（スライド）

2017
・Workshop – テキストマイニングを使った自由記述式アンケートの分析

2019
・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（前半）
・Workshop – ベイズ統計とその外国語教育研究への応用（後半）
・配布資料

⑻ JLTA 著作賞の推薦について

JLTA では 2020 年度より「JLTA 著作賞」の表彰を行っています。推薦図書がある場合は、以下のページにある規程・テンプレートをご確認・ご記入の上、著作賞選考委員長へ送付ください。送付先につきましても、以下リンクをご参照ください。
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

⑼ その他

● 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ（https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login）」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号やパスワードを紛失された方は以下からお問い合わせください
(https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact）。マイページ内の会員向けページにおいて，ジャーナル・ニュースレター等の掲載があります。

● 所属や書類発送先など登録情報に変更がある場合，マイページでの登録情報の変更を３月末までにお願いいたします。学生会員の方には，毎年学生証のコピーをご提出いただいています。**2021 年度会費の納入書送付書のうち、数件が事務局・国際文献社の窓口に返送されております。会員情報に変更があった場合には、必ず MyPage から情報を更新いただくようお願いします。**

● JLTA の各活動は会員の皆様から頂戴した会費によって成り立っております。ご協力いただきありがとうございます。**2021 年度の会費納入状況は例年と比較して低い水準となっております。何卒会費のお振込がまだの方はお支払いくださいますようお願いいたします。**

● 2020・2021 年度の会費振込について，これからの方は早急によろしくお願いいたします。2020 年度分のお支払いがない場合には，2022 年 4 月より送付物の発送や電子メールの配信がなくなり，マイページの使用もできなくなります。

● 直近２ヶ月の間にメールを受信していない会員の方は，JLTA のメールがスパムメール扱いになっていないかご確認ください。

● 本会の退会を希望される方は，事務局（jlta-post@bunken.co.jp）へご連絡をお願いいたします。

文責：
JLTA 事務局長 横内裕一郎（弘前大学）
JLTA 事務局次長 小泉利恵（清泉女子大学）
藤田亮子（順天堂大学）
日本言語テスト学会（JLTA）公式
Twitter アカウント: @JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have. Please see our English website for more details:

http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599

(1) The 24th annual conference was held from September 4th (Sat) to 5th (Sun), 2021 and it ended with great success. Thank you to everyone who gave presentation and participated. Regarding the next year's conference, (2022), we will let you know the schedule on our website, email, Twitter, etc. as soon as it is decided.

(2) The 2021 Research Meeting is scheduled to be held on Saturday, October 23, 2021 and sometime from February to March in 2022

The 53rd JLTA Research Meeting

【Date and time】Saturday, October 23, 2021 13:50-17:30

【Location】Online (using Zoom)

【Theme】Analytical method of various kinds of speeches and its application to test verification

【Summary】In recent years, the use of speaking data has attracted attention in the verification of performance tests. However, the indicators used for speech analysis tend to be limited to accuracy, fluency, complexity (CAF), and so on. At this research meeting, we will introduce analytical methods other than CAF and application examples for test verification. In addition, by actually analyzing speech data, we aim to deepen our understanding of speech analysis and broaden our perspective of test verification

【Schedule】

13: 30 ~ Reception starts

13: 50 ~ 14: 00 Summary and introduction of lecturer (Yujia Zhou, Tokyo University of Foreign Studies)

14: 00 ~ 15: 00 Textual analysis (Dr. Noriko Iwashita, The University of Queensland)

15: 00 ~ 15: 15 Break

15: 15 ~ 16: 15 Functional analysis (Dr. Fumiyo Nakatsuhara, CRELLA, The University of Bedfordshire)

15: 15 ~ 15: 30 Break

16: 30 ~ 17: 30 Interactional analysis (Dr. Daniel M. K. Lam, The University of Glasgow)

【Registration】 Please register on the following site by Saturday, October 16th. (https://forms.gle/6GJnkHqDrHfLZsV69)

Zoom meeting information will be sent to those who have applied by October 20th.

【Participation fee】Free

【Language】English

【Contact】Yujia Zhou (Tokyo University of Foreign Studies) zhou_yujia@tufs.ac.jp

The 54th JLTA Research Meeting

We will let you know the schedule as soon as it is decided.

(3) Vol. 24 of the JLTA Journal will be published in this winter. This volume will be uploaded to J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.

jp/browse/jltajournal), along with that of the previous volumes.

The *JLTA Journal* invites various contributions. It includes studies related to evaluation in a broad sense, such as classroom-based practice and program assessments that deal with issues and topics pertaining to testing and assessment.

(4) We introduced an "Online Submission and Review System" from the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA's administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the JLTA Journal's quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources.

Details about JLTA Online Submission and Review System

1. Website
https://iap-jp.org/jlta/journal/login

2. Submission period for 2022
Submissions are accepted only during the following period:
April 7, 2022 to March 7, 2022

3. Guidelines pertaining to contributors and templates
Please find the latest guidelines and templates for contributors. You can find them at the following URL.
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62 for details.

4. Contact information of the JLTA editing office: jlta-edit@bunken.co.jp

(5) In 2017, we started **the JLTA Training Lecturer Dispatch project** with the aim of sending a JLTA lecturer to institutions and organizations to conduct training sessions or meetings pertaining to test development and use. The list of lecturers was last updated in the month of April, 2020. Please feel free to convey this information to those who may be interested or for whom it may be relevant.

Website:
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929

(6) **J-STAGE**

With regard to the number of times *JLTA Journal* articles were accessed around the world via J-STAGE (https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal). The following tables provide detailed access information for the period August 2020 to July 2021. As for the 2021 data, there is a large difference between the number of times bibliographic items were accessed and the number of

direct links to PDF files generated. As a result, the table is in a different format from that of the previous year. The total number of direct accesses to PDF was 14,239 (last year: 11,695), an increase from that made in the previous year. However, several articles have been accessed extremely frequently, which is a trend never seen before. As a result of the emergence of online lessons, the articles may have been used in lessons in a manner that takes into consideration copyright requirements. The top access rankings based on country were the same as that in the previous year. However, the results show that there were a number of direct accesses to PDF files reported from Canada.

Download destination and number of accesses

Old : 2019/08～2020/07

	Country	bibliographic items	PDF
1	America	3826	3969
2	Japan	2468	2779
3	China	1160	246
4	Korea	808	76
5	Germany	683	405
6	France	304	72
7	Russia	223	44
8	Lithuania	136	27
9	England	96	1099
10	Canada	59	270

New : 2020/08～2021/07

	Country	Bibliographic items	Country	PDF
1	America	2628	Canada	5028
2	Japan	2483	Japan	3277
3	China	1028	America	2606
4	Turkey	789	China	483
5	Germany	399	England	322
6	France	154	Turkey	303
7	England	146	Philippines	236
8	Russia	138	France	209
9	Korea	120	Chile	171
10	Singapore	88	Sweden	166

(7) Our website has various useful contents for the public. It is our Web Publication Committee that is responsible the creation or organization of content. Since some of the content posted is in English, we hope you use them to the fullest.

WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

Tutorial (in Japanese)

- ・What is a “good” test?: Validity, reliability, and practicality
- ・The concept of test constructs
- ・Test Specification
- ・ Testing Reading-6 basic test formats-
- ・Testing Listening
- ・Testing Writing
- ・Testing Speaking
- ・Testing Vocabulary & Grammar
- ・Standard Errors of Measurement
- ・What is “Effect Size”?
- ・Test result reporting to enhance learning
- ・Classical Test Theory

・Confirmatory Factor Analysis
・Meta-Analysis
・Qualitative Methods

Workshop Videos

2014 (in Japanese)
・Workshop 1 – Basic Concepts of CAT
・Workshop 2 – J-CAT

2015
・Workshop 1 – Introduction to Test Data Analysis (in English)
・Workshop 2-1 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)
・Workshop 2-2 – How to Develop Tests that Improve Students' English Proficiency (in Japanese)

2016 (in Japanese)
・Workshop 1-1 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Beginning Guide)
・Workshop 1-2 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Theoretical Guide)
・Workshop 1-3 – Introduction to Effect Size: Basic Concepts and Practices (Practical Guide)

2017 (in Japanese)
・An Analysis of Free Descriptive Questionnaire by Text Mining

2019 (in Japanese)
・ Bayesian Statistics and its Application to Foreign Language Education Study
・Handouts

(8) Recommendation for the JLTA Book Award

JLTA commenced the "JLTA Book Award" event in 2020. If there is book you want to recommended for the award, please check and fill out the rules and templates on the following page and send it to the Chair of the Book Award Selection Committee. Please refer the link given below for the shipping addresses.
http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=1618

(9) Other Information

● Have you visited the "My Page" site (https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login)? This is the page where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status. Please contact us via https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access the recent *JLTA Journal*s, previous newsletters, and other materials specifically meant for the members via the "My Page" site.

● If there are any changes in the affiliation, address, and other information that need to be carried out, please update your registered

information on “My Page” by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of their student certificate.

● **Some of the letters concerning the 2021 membership fee payment have been returned to the secretariat/the International Academic Publishing Co., Ltd. If there is any change to be made in your membership information, please be sure to update it via My Page.**

● Each activity of JLTA is a result of the membership fees received from members. We appreciate your cooperation. **The membership fee payment status for 2021 is lower than usual. If you have not paid the membership fee, it is our humble request to please pay it.**

● If you have not yet paid the yearly membership fee for 2020 and 2021, please do so at your earliest convenience. If you fail to pay the fee for 2020, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the “My Page” site after April 2022.

● If you have not received emails from JLTA for the last two months, it is because your email accounts might have classified our emails as spam. If this is the case, please check the settings of your email account.

● If you are planning to leave JLTA, please let us know by sending a message to jlta-post@bunken.co.jp.

JLTA Secretary General
Yuichiro YOKOUCHI
(Hirosaki University)
JLTA Vice Secretary General
Rie KOIZUMI
(Seisen Women’s University)
Ryoko FUJITA (Juntendo University)
JLTA Official Twitter account:
@JLTA_official
https://twitter.com/JLTA_official

＜編集後記＞

コロナの影響により約 1 年半対面での授業や学会がなくなってしまい、オンラインになれてしまうとこのままずっとオンラインでもいい気がしてしまう時があります。しかし、言語教育はやはり対面でのコミュニケーションがなければ、成り立たないと思います。コロナが少しずつ収束している気配がありますので、一刻も早く何も心配せず生活できる日を心より願っております。(TK)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1）海外学会報告，　2）書評，3）研究ノート，4）意見，またその他当学会員の興味関心に沿うもの。

日本言語テスト学会事務局
〒036-8560 青森県弘前市文京町 1
弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター
横内裕一郎研究室（郵送時には必ず研究室名を明記してください）
TEL: 0172-36-2111（代表）
e-mail: u16yoko@gmail.com
URL: http://jlta.ac

編集：　広報委員会
委員長　古賀功（龍谷大学）
副委員長　土平泰子（聖徳大学）

委員
笠原究　（北海道教育大学旭川校）
長沼君主（東海大学）
宮崎啓　（東海大学）